21 世紀のアジアにおける小児循環器学： 3 カ国フォーラム 10 年の流れと日本の使命

岡山大学病院循環器疾患集中治療部

赤木 禎治

Pediatric Cardiology of 21st Century in Asia : 10 Years Experiences of 3 Countries Forum and Mission of Japan

Teiji Akagi

Cardiac Intensive Care Unit, Okayama University Hospital, Okayama, Japan

2013 年 3 月 22 ～ 23 日，韓国の慶州で第 9 回 Korea Japan China Pediatric Heart Forum が開催された。国内からも約 20 名の先生方に参加していただき，3 カ国間の学術交流は活発に，かつなごやかに行われた。フォーラムではさまざまなトピックスについて，3 カ国それぞれ数名の講演者を推薦する形式を取っている。2013 年は初日の肺高血圧症シンポジウムは東京医科歯科大学の土井庄三郎先生に，2 日目の講演には国立循環器病研究センターの白石公先生，自治医科大学の河田政明先生，北里大学の石井正浩先生に，日本側の代表としてそれぞれの専門分野で講演していただいた。この他にも一般演題約 50 演題が発表され，午後は 3 会場に分かれてディスカッションが行われた。今回，日本小児循環器学会雑誌の巻頭言を執筆する機会をいただいたので，3 カ国フォーラム 10 年のあゆみについて記録を残したいと思う。

2000 年になってアジア，特に東アジア地区の小児循環器領域の交流が活発になり，それまで AHA (American Heart Association) や ACC (American College of Cardiology) あるいは AEPC (The Association for European Paediatric and Congenital Cardiology) といった，欧米での学会の場を機会にしか会うことのなかったアジア各国の小児循環器医が，より近くでもっと簡単に会合を開き，お互いの知識と経験を交換し合おう，という機運が高まってきた。2004 年には，当時 Texas Children's Hospital にいた Anthony Chang 先生 (現在 Children's Hospital of Orange County, CA) や上海小児病院のグループが中心となって先天性心疾患シンポジウムを開催し，アジアを中心とした先天性心疾患の国際学会を作ろうという機運が一気に加速した。この流れは後に APPCS (Asia Pacific Pediatric Cardiac Society) を開催する動きに繋がっていく (次回 2014 年インド，ニューデリーで第 5 回 APPCS 開催予定)。

これとは別に，当時東京女子医科大学の中澤誠先生が中心となって，日本，韓国，中国を中心とした東アジアの定期的な学術交流を行おうという呼びかけも進められた。大がかりな国際学会とは違った，よりコンパクトに継続可能な学術交流を主体とする研究会を目指そうという趣旨であった。幸い中国からも韓国からも開催に非常に前向きな反応が得られ，2005 年 2 月 28 日，上海で第 1 回目の会議が行われた。中国からは Fudan 大学の Ning 先生，Gui 先生，Huang 先生，北京の Gu Hong 先生，韓国からは In-Sook Park 先生，Heung Jae Lee 先生，そして日本からは中澤先生と私が出席した。この会議で，①日中韓で 1 年ごとに分担しながら定期的学術集会を行うこと，②新たな組織は作らずに学術交流を目指す「フォーラム」とすること，③開催はそれぞれの国の学術集会とリンクさせ主催者の経済的負担を減らすこと，④会の呼称は主催国，次期開催国，次々期開催国の順に呼ぶこと，という基本的な合意が得られた。そして第 1 回は 2005 年，日本小児循環器学会と同時開催されることとなった。この年は国立成育医療センターの石澤瞭先生が会長を務められ，東京で開催されることになっていた。石澤先生からは「全面的に協力しますよ」とありがたい言葉をいただき，第 1 回のフォーラムが開催されることになったのである。日本小児循環器学会中に「アジアセッション」として開催され，3 カ国以外のアジア各国からも参加していただいた。学会終了後，20 名あまりの参加者で新宿の焼鳥屋で打ち上げを行ったのが昨日のように懐かしい。以降，この 3 カ国フォーラムは以下のような日程で開催されてきた。

- 第 1 回 2005 年 7 月 7 日 日本(東京)
- 第 2 回 2006 年 9 月 7 日 中国(上海)
- 第 3 回 2007 年 3 月 31 日 韓国(ソウル)
- 第 4 回 2008 年 7 月 3 日 日本(郡山)
- 第 5 回 2009 年 9 月 11 日 中国(北京)
- 第 6 回 2010 年 3 月 27 日 韓国(ソウル)
- 第 7 回 2011 年 7 月 8 日 日本(福岡)
- 第 8 回 2012 年 10 月 25 日 中国(天津：中止)
- 第 9 回 2013 年 3 月 23 日 韓国(慶州)
- 第 10 回 2014 年 7 月 4 日 日本(岡山：予定)

それぞれの開催国の事情で学会形式も異なり、中国ではレクチャー主体、韓国ではシンポジウム形式、日本では小児循環器学会のセッションとして開催されてきた。ご存じのように第 8 回は政治的影響で中止されることになったのは、本当に残念な記憶である。

21 世紀はアジアの時代だといわれすでに 10 数年、経済の浮き沈みはあるものの、確かにアジアの発展は著しい。そして経済のみならず医療の分野でも驚くような速さで、変革が起こっている。日本ではまだ導入されていないような最新のカテーテル治療シンポジウムが東南アジアの国々で、世界中のエキスパートを集めて開催されている。人々の交流も増え、より緊密な医療情報が共有されるようになるかと思われていたが、特に日中韓を中心とした北東アジアでは、政治の軋轢が人々の心に少なからず影響を及ぼしている。しかしながら私は、アジアの中で日本がこれまでの実績と経験をもとにしっかりとした学術的イニシアチブを持ち続ける使命があると信じている。そして日中韓 3 カ国の学術交流は、アジアの小児循環器学を牽引する大きなエネルギーになるはずである。